

源氏物語の風土 (2)

森 本 茂

白 川 書 院

著者略歴

昭和31年2月 立命館大学大学院日

現在，相愛女子短期大学講師。

風土関係の著書とおもな論文

著書 「源氏物語の風土」(昭和40年5月，白川書院) 350円

論文 源氏物語の風土(平安文学研究) 堀川(国語教育)
六歌仙の歌枕(国文学・学燈社) 枕草子の自然(解釈と鑑賞)
源氏物語における「常陸」について(相愛女子短大論集)
文学散歩案内(源氏物語必携)

現住所

京都府乙訓郡長岡町字調子71の55

国文叢書 4

源氏物語の風土 2

1968・2・15 初版

著者 森本 茂

発行者 臼井喜之介

版元

京都市左京区京大北門前

株式会社 白川書院

¥ 350

電話 (781) 3980
(791) 3638

振替 京都 922

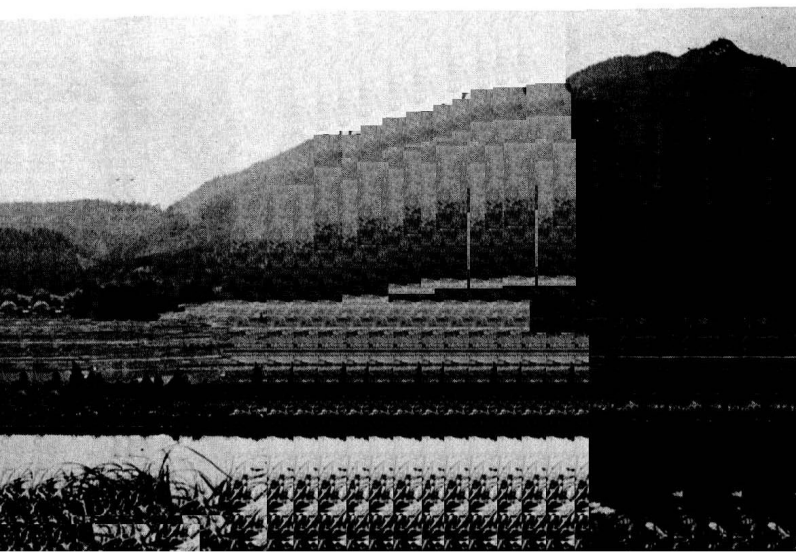
D風土 2

付 源氏物語地名辞典

〈京都文学散歩〉

森 本 茂

大 原 の 里



源氏物語の風土 2

目次

源氏物語の風土

一 比叡山・横川への道 ……セ

比叡山(セ) 比叡の歴史(二三) 三塔(一九) 東塔(一九)

西塔(三三) 横川への道(三五) 横川(三六)

横川の堂塔(三三)

二 逢坂山の秋 ……三四

逢坂山(三四) 逢坂山の歴史(三九) 逢坂山の関(四四)

関の清水(五一) 蟬丸神社(五三) 関寺跡(五九)

三 石清水・淀の旅 ……三

八幡詣で(三三) 御旅所・高良社(三六) 石清水八幡宮(三七)

本殿(三七) 石清水の祭(三七) 護国寺跡(三七)

石清水社(三七) 石清水への道(三七) 淀の渡り(三七)

四 雲林院の冬日 ……五

雲林院(八五) 雲林院の歴史(八八) 雲林院の自然(九三)

知足院(九六) 船岡山(一〇一) 上品蓮台寺(一〇五)

五 大原小野の里 ……一〇

小野の山莊(二〇) 小野(二七) 大原への道(三四)

大原(三七) 惟喬親王の墓(三九) 魚山(三四)

音無の滝(二三)

六 木幡の古道 ……一三

宇治の通り路(二九) 木幡の里(二四)

宇治陵・浄妙寺(二四六) 木幡山(二五三)

七 賀茂の祭 ……二五

糺の森(二五〇) 賀茂(二六〇) 賀茂祭(二六三)

祭の還さ(二六〇) 斎院(二七〇) 御手洗(二七四)

櫓の小川(二七五)

源氏物語地名辞典 ……二九

陸奥(二八一) 常陸(二八三) 武蔵(二八三) 相模(二八三)

駿河(二八四) 信濃(二八四) 美濃(二八四) 出羽(二八五)

越前(二八五) 若狭(二八五) 伊勢(二八六) 紀伊(二八六)

近江(二八七) 山城(二八九) 大和(二九〇) 摂津(二九〇)

和泉(三二一) 播磨(三二二) 但馬(三三三) 筑紫(三三三)

肥前(三三五) 肥後(三三五)

源氏物語の地名について ……二六

[illegible]

源氏物語の風土 1 内容

文学環境としての平安京 文学博士 玉 上 琢 弥

源氏物語について 解説 あらすじ

源氏物語の風土

鳥辺野の里	(四)	清水寺の観音	(五)
嵯峨野の住居	(七)	野宮の春	(九)
大原野への道	(一〇)	宇治の自然	(一三)
宇治十帖の世界	(一七)	須磨明石の浦	(一六)
大宰府の秋	(一八)	初瀬の川波	(二五)

紫式部の墓 参考書一覧

一 比叡山・横川への道

比 叡 山

夏の朝にはめずらしく、明けがたから小雨がふっている。おかげで大気が洗われてそうかいである。比叡山（叡山）のあたりにはまだうすい雨雲がのこっているけれども、とにかくきょうは比叡・横川まで足をのばしてみようと思う。横川は西塔から北へ四キロもほそい杣道をわけて行くのだと聞いている。

京福電鉄の出町柳から八瀬線で、一乗寺・修学院・宝が池まで行くと、目のまえに叡山の山はだがせまってくる。山というものは遠望していると、そのけわしさが壮大であるとともに、ときには優美にさえ感じられて、うつくしいロマンと夢をさそうことがあるが、じっさいに山にちかく接すると、岩や石がきりたち深い谷間があり、大木が空をおおっていて、じつにきびしくつめたいものだと思う。わが叡山もそのとおりである。

終点の八瀬におりたつと、山気がひやっとしてころよい。高野川は山の緑をうつしてそうそうと流れている。

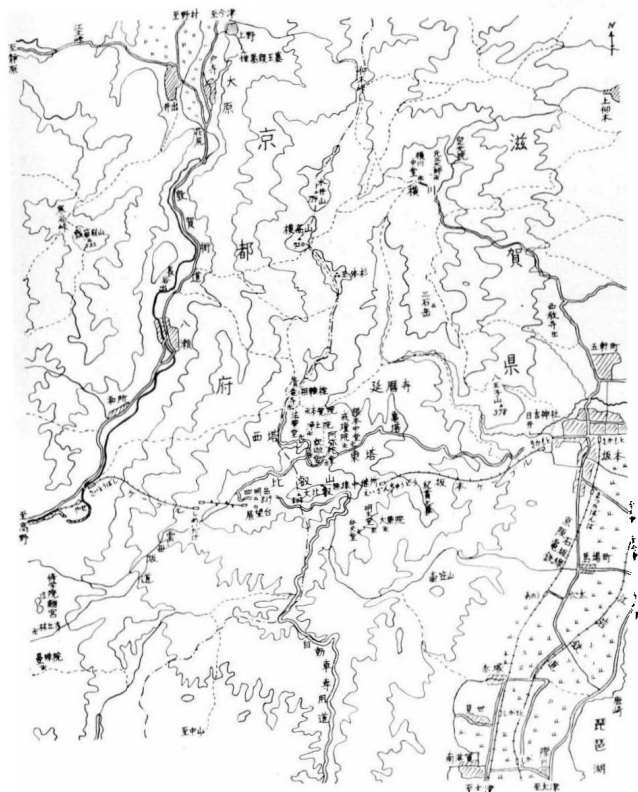
敦賀街道を和所に向かって行くと、高野川をはさんで両岸に山がせまり、ふりあおぐ叡山の

尾根おねがはるかに見渡されて、槇まきの木立は濃いかげをつくっている。谷間を北に見とおすと尾根が高くなって、横高山（釈迦岳）が正面にそびえている。横川はその山の東を行ってさらに奥のほうになる。この街道は八瀬から長谷出はせだしをへて、花尻橋はなじりのところから大原盆地になるのであるが、わたくしは横川への道をいそぐために、和所からケープルの起点「さいとうばし」にひきかえした。そこからケープルのとると、わずか十数分で比叡山の四明岳しめだいにつく。

さて比叡山延暦寺は、平安京とともに生きてきたところであって、東塔とうとう・西塔さいとう・横川よかわの三塔にわかれている。はじめに源氏物語との関係をひろってみよう。

夕顔は京の五条にすむ中流の女で、「らうたげにたをたをとして」どこまでも夕顔の花のようにかれんななかに、それでいて男女の情愛を知らぬでもない十九の少女であった。しかし八月十六日の夜、源氏と夕顔が「なにがしの院」（河原院か）で一夜を明かしたとき、物のけにとりつかれてあっけなく死んでしまった。源氏は夕顔のなきがらをこっそりと鳥辺野とりべのに葬つてから、四十九日の供養くようを叡山の法華堂でしめやかにおこなった。その供養には源氏みずから願文がんもんをつくり、衣装やふせ物もおしかなかった。供養の僧には、源氏を夕顔に手びきした惟光これみつの兄阿闍梨あざりをえらんだ。

かの人の四十九日、しのびて比叡の法華堂にて、事そがず、装束さうぞくよりはじめて、さるべきものども、こまかに誦経ずきやうなどせさせ給ふ。経、仏の飾かざりまでおろかならず。惟光が兄の阿闍梨あざり、いとたふとき人にて、二無なうしけり。御書みふの師にてむつまじくおぼす文章博士もんさうめして願文がんもんつくらせ給ふ。（夕顔の巻―日本古典全書。以下おなじ）



比叡山付近略図

比叡山は、大比叡・四明岳・横高山・水井山などをふくむ総名であって、周囲は十数キロにもわたる。東に琵琶湖をひかえ、北西は大原の里に接する。



比叡山の遠望

賀茂川から比叡山をのぞむ。
左の二峰は横高山と水井山で、
その向こうに横川がある。

つぎは、横川僧都があらわれる。藤壺^{ふじつば}は桐壺帝^{きりつばの}の中宮であって、教養もありうつくしく、家がらもよい人であったが、源氏はこのかたにひそかな愛情を寄せていて、ついにふたりのあいだに密通事件がおこり、冷泉院^{れいさいいん}が生まれた。なにもござんじない帝は、源氏に生きうつしの冷泉院を愛されたが、まもなく他界された。藤壺は帝の一周忌がかわって、出家・受戒することにした。藤壺二十九歳の冬のことである。その日は藤壺の伯父^{おや}の横川僧都^{かわけそうず}が山をおりて彼女の髪を切りおとした。世の人々はみな悲しい思いにかられて泣いた。

心強うおぼしたつさまをのたまひて、果つるほどに、山の座主^{ざす}めして、忌むこと受け給ふべきよしのたまはす。御伯父の横川の僧都^{そうず}近うまゐり給

ひて、御髪おろし給ふほどに、宮の内ゆすりて、ゆゆしう泣き満ちたり。何となき老い衰へたる人だに、いまはと世をそむくほどは、あやしうあはれなるわざを、まして、かねての御気色にも出だし給はざりつることなれば、親王もいみじう泣き給ふ。まゐり給へる人々も、大方のことのさまも、あはれに尊ければ、みな袖滯らしてぞ帰り給ひける。(賢木の巻)

つぎは宇治十帖のおわりのほうで、もうひとりの横川僧都が登場する。

そのころ横川に、なにがしの僧都とかいひて、いと尊き人住みけり。八十あまりの母、五十ばかりの妹ありけり。(手習の巻)

この僧都は、初瀬もうでの帰りに急病にかかった母の大尼君を看病するため、山をおりて、宇治にやってきたが、その夜、宇治院の森かげで正気をうしなっている浮舟を発見した。浮舟

藤中納言—女

—横川僧都

大尼君—

—妹尼

—中將

—故姫君

故衛門督

は薫と匂宮の愛情の板ばさみから、みずから宇治川に身を投じようと思っていたが、こうして僧都に助けられ、妹尼につれられて人しれず小野に住む。妹尼はなくなった姫君の生まれかわりだといってよろこび、浮舟を中將にめあわせようとするが、浮舟は聞きいれず、尼君たちのるすに、たまたまおとずれた横川僧都にお願ひして剃髪してもらった。このあたりは宇治十帖のなかのクライマックスである。

浮舟が小野に生きているということ伝え聞いて、薫は浮舟の弟小君をつれて叡山の根本中堂にこもり、さらに横川に行くとところが二か所あらわれる。



月ごとの八日は、必ず尊きわざせさせ給へば、薬師やくし仏に寄せたてまつるにも
てなし給へるたよりに、中堂には、時々参り給ひけり。それよりやがて横川に
おはせむ、とおぼして、かのせうとの童わらわなる、率ふておはす。(手習の巻)

山におはしまして、例せさせ給ふやうに、経きやう仏など供養くやうせさせ給ふ。またの
日は横川におはしたれば、僧都おどろきかしこまりきこえ給ふ。(夢浮橋の巻)

比叡の歴史

比叡山というのは、京都がわからみえる四明しめい岳(八三九メートル)と、その東にある主峰の
大比叡(叡南岳、八四八メートル)と、北方の横高山(釈迦岳、七五〇メートル)・水井山
(七九四メートル)などをふくむ総名であって、周囲は十数キロにもわたる広い山である。

「京都の自然」(京都自然研究会編・六月社)には、京都市内と比叡山頂とを統計的に過去
三十年から七十年にわたり比較してあるが、おおざっぱにいうと、山頂では気温が五、六度低
く、雨量は二、三割多く、風速は約三倍である。

いうまでもなく叡山は、延暦十三年(七九四)京都に平安京ができてから、宗教的・歴史的
・文学的に京都とともに生きてきた名山であるが、ふるくは古事記に日枝山ひえとしてあらわれて
いる。

次に大山咋神おほやまぐひの、またの名は山末之大主神やまずののおほぬし。この神は近淡海あふみの日枝ひえの山に坐し、また葛野かつのの松
尾なに坐して、鳴鏑なりかを用つ神ぞ。(上巻)

八 瀬 の 里 →

比叡山ひえのふもとにある八
瀬は、静かな山間の村で
ある。高野川の向こうに
横高山が見えている。

この大山咋神を祭るのが坂本町の口吉神社であって、この社が延暦寺の鎮守である。だいた
いにおいて延暦寺は比叡山の東がわ、つまり滋賀県がわに伽藍があつて、琵琶湖に向かうほう
が正面だと考えられるから、日吉神社は延暦寺の正面のふもとに鎮座していることになる。

その後、坂本に生まれた伝教大師（最澄）が延暦七年（七八八）ここに一乗止観院（根本中
堂）を建ててから、山を比叡山とあらため、延暦寺はわが国はじめての天台宗の寺院として、
弘法大師（空海）の真言宗高野山とあいたいすることになる。伝教大師は比叡山中堂を建てた
とき、つぎの歌をよんでいる。

阿耨多羅三藐三菩提の仏たちわが立つ所に冥加あらせたまへ

（新古今集・卷二十・釈教歌）

それより前、奈良時代の宗教の中心であつた法相宗は、教義がむずかしくて大衆から離れて
いたばかりでなく、政治に関係して腐敗墮落していた。そこで伝教大師はあたらしい人間観の
もとにあたらしい修行法によって、このような山地に寺院をつくることにした。そのあたらし
い修行法というのは、ふくぎつな戒律修行をやめ、静かな山に入つて静かに考えるという原始
的なたちであつた。

伝教大師ののちは、修禪大師（義真）・慈覚大師（円仁）・智証大師（円珍）らの天台座主
によつてますます栄えて、第十八代座主である元三大師（良源）のときは最盛期となつて、伽
藍は三塔九院三千坊にもなつたという。「二中歴」によると、嘉承年間（一一〇六―七）に延
暦寺の僧数は三千人、その内訳は東塔に千八百十三人（無動寺谷をふくむ）、西塔に七百十七

人（黒谷をふくむ）、横川に四百七十人（飯室谷をふくむ）となつてゐる。そのころ清水寺が三百三十三人であるから、これでみても延暦寺のさかんなありさまがしのばれるのである。

平安時代の末期になると、延暦寺の多くの僧兵がふもとの日吉神社の神輿をかついで朝廷をおびやかしたり、また奈良の諸寺や京都の清水寺とたびたび争つたりしたことは有名である。

鎌倉時代になると、浄土宗の法然、浄土真宗の親鸞、臨済宗の栄西、時宗の一遍、曹洞宗の道元、法華宗の日蓮などは、みな若い日、叡山で修行している。

つぎは倉田百三の「出家とその弟子」の一節であつて、法然の弟子である親鸞と、親鸞の弟子である唯円とが叡山をながめながら対談しているところである。

親「ここですばらく休んで行こうか」

唯「それがよろしゅうございます。（ざぶとんを持ってきて敷く）今日はよく晴れて比叡山があのようにはっきりと見えます」（すわる）

親「あの山には今もたくさん修行者がいるのだから」

唯「お師匠さまもむかしあの山に長くいらしたのですね」

親「九つときはじめて登山して、二十九のときに法然さまに会うまでは、たいていあの山で修行したのです」

唯「そのころのことが思われるでしょうね」

親「あのころのことは忘れられないね。若々しい精進と憧憬とのあいだにまじつて、一筋に煩悶したのだから。夕方など暮れゆく京の町をながめて、あこがれるようなさびしい思